

恵泉草花検定実施のための基礎的検討

西村悟朗、山浩美、丸山美夏、君塚亜紀、浅岡みどり、小澤文子、
本多洋子、宮内泰之

‘Keisen University Certificate in Identification of Flowering Plants’

NISHIMURA Goro, YAMA Hiromi, MARUYAMA Mika,
KIMIZUKA Aki, ASAOKA Midori, OZAWA Ayako, HONDA Yoko,
MIYAUCHI Yasuyuki

Abstract

We had carried out the ‘Keisen University Certification in Identification of Flowering Plants’ from fifth grade to fourth grade test until 2013. Furthermore, in 2014 the third grade test, in 2015 the second grade test was conducted. We are going to require the examinees answer scientific name at the second grade test and the first grade test, so we analyzed strictly the questions being considered.

はじめに

2014 年度は恵泉草花検定 5、4 級に加えて 3 級を、2015 年度は 2 級を実施した。2 級からは植物の学名についても解答を求めることから、出題候補種に関するより厳密な検討、分析を行った。

1 学名を覚えることの意義について

受験者に学名と分類を学ぶ意義を理解してもらうため、以下のような文書を作成した。2016 年度春季から公表した。

(1) 恵泉草花検定における学名について

恵泉女学園では、花壇園芸学などの授業を通して、植物の和名だけでなく学名も覚えることを基本としてきました。以下では、植物の学名のしくみや分類の基礎について簡単に説明いたします。学名を覚えることにより、草花への理解をより深め、花壇の楽しみ方をさらに広げていただければ幸いです。

(2) 学名を学ぶ意義と楽しみ

世界の国々では、植物に対してその国独自の名前が付けられ、その国の言語で表記されています。一方、植物を含む生物には、現在までに確認されているほぼ全てのものについて世界共通の名前がつけられています。これが学名で、ラテン語で表記されます（発音について決まったルールはありません）。

海外の植物園やガーデンでは、植物のラベルに学名が記載されています。海外の種苗会社のカタログや園芸に関する書籍にも学名が表記されています。つまり、その国の言葉がわからなくても、学名さえ知っていれば、その植物を思い浮かべることができ、ほとんど世界中の学者や愛好家に通じます。そして生活形や他の種類との関係が分かりやすくなり、その地のガーデンの様子をうかがい知ることが可能となるのです。本検定2級のテーマ「草花を通して広がる海外への扉」の言葉の通り、学名は世界に開かれた扉、あるいはその鍵ともいえるでしょう。

学名は知識と^{うんちく}蘊蓄の宝庫でもあります。

スイセンの属名 *Narcissus* はギリシャ神話の美少年ナルキッソス（古代ギリシャ語: *Narkissos*、英語: *Narcissus*）の名前に由来します。ナルキッソスはニンフたちに慕われましたが誰をも愛さず、泉の水に映った自分の姿に恋し、満たされぬ思いにやつれ死んで、水仙の花に化したといわれています。花言葉が自己愛というのは有名な話です。

チューリップの *Tulipa* はトルコ語の *tulband*（ターバンの意）が語源という説があります。たしかに中近東の人々が頭に布を巻き付けた被り物の「ターバン」に花の形が似ていますね。

キンギョソウの *Antirrhinum* はギリシャ語の「鼻に似た」という意味で、花の

形を鼻に見たてたものです。英語ではSnapdragonと口を広げた竜の姿に例えられ、中国では花の様子がヒレを広げて泳いでいる金魚の姿に見えることから、金魚草と呼ばれています。日本でも同じ名前が付けられました。国によって見方が違うのが面白いです。

学名を知ること、植物の名前の蘊蓄の中に遊ぶという楽しみも広がっていきます。

(3)学名と分類の構成

全ての生物は、起源が同じと思われるもの同士が同一のグループとされ、大まかなグループが順次細かく分けられていき、「種^{しゅ}（ここでは、見た目が同じで、個体同士で交配ができる一群としておきます）」という基本単位に行きつきます。例えば、テッポウユリとヤマユリは同じユリの仲間ですが、花の形、大きさなどが異なり、お互い別種として区別されます。しかし、種としては異なるものの、共通点も多いのでひとつのグループ「ユリ属」としてまとめられます。同様に複数の「属」が集まって「科」、さらには「目」、「綱」、「門」と次第に規模の大きい分類群となっていきます。「属」、「科」などの比較的細かい分類群に含まれる植物同士は、その形態だけでなく性質なども似ていることが多くなります。したがって、分類を覚えることはその植物の名前を覚える近道となり、花壇等で植物を扱う上で有効となるのです。

学名(種名)は属名と種形容語(かつては種小名と言われていました)を併記する二名法と呼ばれる形式で表され、それに命名者名が付きます。例えば、テッポウユリの学名と命名者名は*Lilium longifolium* Thunb.であり、*Lilium*が属名、*longifolium*が種形容語、Thunb.(最初にこの学名を発表したThunbergの省略形)が命名者名です。学名を表記する場合、属名と種形容語は必ず記さなければなりません、命名者名は省くことができます。なお、属名と種形容語は慣例としてイタリック体か、あるいはそれができない場合は下線を引くことになっています。

なお、和名は自然科学の分野では原則としてカタカナで表記することとなっていますので、恵泉草花検定でもこれになります。

(4)学名と分類の変化

分類や種の学名は固定されたものではなく、研究の進展と共に変更されます。

植物の分類は20世紀半ば以降「新エングラー体系(エングラーはドイツの分類学者)」に従ったものが主流となり、今なおこれが広く使われています。新エングラー体系は、植物を主に花の構造や形により識別することを基本としていました。しかし、DNA解析による分子系統学の発展に伴い、植物の系統や分類がより客観的にわかるようになってきました。これにより、近年では「APG(Angiosperm Phylogeny Groupの略で、日本語にすると被子植物系統グループという意味になります)」が提唱している新しい分類体系が主流になりつつあります。

全体としては「新エングラー体系」と共通する部分が多いのですが、複数の科に細分化されたユリ科や、ヒユ科に統合されたアカザ科など、変更点も多々あります。

「APG分類体系」は植物のDNA解析の結果から、現在みられる植物の分類群が、より原始的な分類群からどのように分化して今日に至っているのかを系統的に知ることができます。本検定も、この新しい「APG分類体系」に従っています。

学名については、原則としてThe Plant Listに従っています。The Plant ListとはThe Royal Botanic Gardens(王立植物園)、Kew and Missouri Botanical Garden(キューとミズーリ植物園)らが共同作業し、これらの機関や他に所蔵されている現在知られている全ての維管束植物と孢子植物の情報をまとめたリストで、インターネットで全世界に公開されています。現在は2013年のVersion1.1が公開されております。

The Plant Listに記載されていない種間雑種については国際栽培植物命名規約に、また、この規約を植物に導入して編纂された園芸学用語集、日本花名鑑、植物分類表も参考にしました。

2 2015年度までに実施した恵泉草花検定の分析

以上のような考え方のもと、検定を行った結果、受験者、合格率は以下のよ

うになった。

(1) 受験者の動向

第1回の「2012年度夏秋季」20名(9名、以下()内は学生受験者数)以降、第2回22(14)名、第3回14(6)名、第4回9(2)名、第5回8(6)名、第6回12(4)名、第7回10(4)名、第7回までの受験者総数は95(45)名と低迷している。この中には、上の級を目指して複数回受験している人もいる。

学生の受験者を増やすため、2014年度は「生活園芸Ⅱ」をはじめとする2年生以上のクラス、2015年度からは1年生の必修科目「生活園芸Ⅰ」にて授業内検定を始めた。授業内検定については、「7. 恵泉草花検定の大学教育への導入」で詳しく述べる。

(2) 合格率の状況

「5級は9割、4級は8割、3級は6～7割、2級は5割程度、1級はなかなか合格できない」という合格率を想定して出題候補数、合格基準を定めた。第1回2012年度夏秋季～第7回2015年度夏秋季まで通しての級ごとの合格率は、5級73%、4級83%、3級78%(第3回～)、準2級67%、2級100%(第6回～)であった。受験者数が少ない(特に2級は受験者1名)ため、合格率についての正確な分析はできなかった。5級については出題数が15問(2015年度夏秋季以降20問に増やした)と少なかったのに対し、合格基準が9割以上の正解となっており、2問(2015年度夏秋季以降3問)間違えただけで不合格になるため、合格率が想定より低かったと考えられる。

3 出題候補種に関する検討とリストの確定

2015年1月までに、1級までの全級の出題候補植物数、出題数を決め、出題候補植物を選定した。さらに、1級まで実施するため、ひとつひとつの植物の和名、学名、英名について、園芸学、形態学、分類学的な検討を行った。科名、学名はAPG分類体系に従った。夏秋季1級は検討中のため、変更の可能性はある。

(1) 実施方法

以下の資料に基づき、和名に対して、現在正名として認められている学名の検討を行った。

- 1) 安藤敏夫・小笠原亮・長岡求、2007、日本花名鑑 4、アボック社
- 2) Christopher BRICKELL, 2010, *RHS Encyclopedia of Plants & Flowers*, Royal Horticultural Society
- 3) Christopher BRICKELL, 2011, *RHS Encyclopedia of Plants & Flowers*, American Horticultural Society
- 4) Christopher BRICKELL, 2013, *A-Z Encyclopedia of Garden Plants Volume1,2*, Royal Horticultural Society
- 5) Christopher BRICKELL, Henry Marc CATHEY, 2014, *A-Z Encyclopedia of Garden Plants*, Royal Horticultural Society
- 6) 園芸学会編、2005、園芸学用語集・作物名編、養賢堂
- 7) Janet CUBEY, 2015, *RHS Plant Finder 2015*, Royal Horticultural Society
- 8) Missouri Botanical Garden Plant Finder,
<http://www.missouribotanicalgarden.org/plantfinder/plantfindersearch.aspx>
- 9) 大場秀章、2009、植物分類表、アボック社
- 10) 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩、2015、日本の野生植物 1、平凡社
- 11) 栽培植物分類名称研究所記、2008、国際栽培植物命名規約、アボック社
- 12) 副島顕子、2011、植物名の英語辞典、小学館
- 13) Steven M. STILL, 1994, *Manual of Herbaceous Ornamental Plants*, Stipes Publishing Llc.
- 14) The Plant List, 2010, <http://www.theplantlist.org/about/>

(2) 出題候補植物の選定について

出題候補植物の選定は、Herbaceous Plant Material 2012 (Keisen University) に記載されていた植物を基にしたリストの中から、2012年度に5、4級を、その後順次3、2、1級と種類を積み上げて行った。2010年度には1級の候補植物を110種としたが、その後の検討で重要な植物のものが判明したため、120種

に増やした。その過程で種類を積み上げていくのではなく、もっと幅広くリストアップした中から選定していくという手順であるべきことがわかり、2015年度には428種をリストアップし、これを「恵泉草花検定植物データベース」と呼ぶこととした。

選定していく中で近縁種を区分したり、過不足がないことを確認するために、分類順にすることが有効なことが再認識された。また、前項「学名を覚えることの意義について」で述べたように、受験者にとっても分類順にすることが有効である。

2014年10月にそれまでに選定してきた内容を踏まえて、恵泉草花検定の出題候補植物リストに掲載する植物の対象範囲を「恵泉草花検定植物リスト関連ルール」にまとめた。本ルールでは、草花検定として扱う植物として、「花壇材料、特に恵泉でよく使う花壇材料」「身近な草花、知っておいてほしい草花」などを対象範囲とすることが定められている。

1級までの植物を選定していく中で、このルールに則ってはいるが、見直すべきと思われるものがあった。例えば、花壇材料としてよく使うが木本植物であるために出題候補植物からはずしたハーブ（ラベンダー、ローズマリーなど）や、花壇材料としてはあまり使われていないが文化的に重要と考え出題候補植物に入れた植物（ススキ、レンゲソウなど）などである。今後、定期的に見直していく予定である。

（3）分類学的検討

当初は和名の50音順に出題候補植物リストを作成していたが、和名で探しやすいという以外の利点がないため、2014年度夏秋季からAPG分類体系に従った。分類学上近い植物を同じグループとして捉えられるようにしたことは、科学的知識を学ぶ機会となり、覚え方として適切であり、栽培する上でも花壇材料として利用する上でも有効である。

「恵泉草花検定植物データベース」においては、種(植物)に以下のような番号をつけることとした。種に付帯する番号は、以下①～⑤(①=科、②+③=属、④+⑤=種)を組み合わせたもので、属と種の番号にアルファベット頭文字を入れることで、後から「恵泉草花検定植物データベース」に植物を追加し

た場合でも、比較的わかりやすく並べる事ができる。

①「植物分類表」の科番号

②属のアルファベット頭文字

③②で頭文字が同じ属は、並び順に番号をつける

(②が同条件の中に、後から追加した属は、その中の最後の番号をつける)

④種のアルファベット頭文字

⑤④で頭文字が同じ種は、並び順に番号をつける

(④が同条件の中に、後から追加した種は、その中の最後の番号をつける)

(4)園芸学的検討

種形容語が確定できないものは、属名のみの表記とした。園芸品種群として特定できなかったものや、和名が単一種としての和名ではないものなどで、以下のものが、属名のみの表記となっている。

- ・ *Tricyrtis* タイワンホトトギスと日本のホトトギスの交雑種が多く使われているので、ホトトギスの種形容語の *hirta* はとる。
- ・ *Narcissus* *N. pseudonarcissus*(和名ラッパズイセン)は原種で、一般にはほとんど栽培されていない。
- ・ *Eupatrium* 花壇では *E. Japonicum* (野生のフジバカマ)ではなく、ヒヨドリバナとの交配種をフジバカマという呼び名で主に使用しているため。
- ・ その他、*Freesia*、*Nemesia*、*Farfugium*も属名のみとした。

「国際栽培植物命名規約第13条」に、「栽培品種の地位は、栽培品種形容語を一重引用符で囲むことにより示される。二重引用符、そしてcv.とvar.という省略形は、栽培品種形容語を区別するために栽培品種名で使用されてはならない」とある。したがって栽培品種名として「cv.」と「var.」は使用しないこととした。交雑種「×hybrdus」園芸品種群「Group」は命名規約で認められているため使用する。

「×hybrdus」「Group」を使用した例は以下の通りである。

Alstroemeria ligtu Hybrids

Gladiolus × *hybridus*

Kniphofia × *hybrida*

Hippeastrum × *hybridum*

Anemone × *hybrid*

Aquilegia McKana Group

Clematis × *hybrida*

Delphinium Belladonna Group

Delphinium Elatum Group

Celosia argentea var. *cristata* Kurume Group

Celosia argentea var. *cristata* Plumosa Group

Heuchera × *hybrida*

Pelargonium Regal Group

Fuchsia × *hybrid*

Lupinus polyphyllus Hybrids *Lupinus polyphyllus*を親に改良されたものが主流なのでHybridsをつける

Brassica oleracea Acephala Group

Brassica rapa Pekinensis Group

Primula Polyanthus Group

Petunia × *hybrid*

Verbena × *hybrida*

Mimulus × *hybridus*

Gerbera jamesonii Hybrids

以下の植物は、品種名を採用した。

- ・ *Hosta sieboldiana* ‘Elegans’ 実際には多くの品種があるが、‘Elegans’ を選んだ。オオバギボウシの変種。
- ・ *Pennisetum setaceum* ‘Rubrum’ 未検討 = 夏秋1級
- ・ *Lysimachia nummularia* ‘Aurea’ 未検討
- ・ *Trachelospermum asiaticum* ‘Hatsuyukikazura’ 未検討
- ・ *Glechoma hederacea* ‘Variegata’ 未検討
- ・ *Ocimum basilicum* ‘Dark Opal’
- ・ *Penstemon digitalis* ‘Husker's Red’
- ・ *Leucanthemum paludosum* ‘North Pole’

学名はThe Plant Listにより、Accepted(正名として認められている)かSynonym(異名)かを確認した。原則としてAcceptedの学名を採用したが、Synonymを採用したものもある。

- ・ *Kochia scoparia* コキアはSynonymだが、和名がコキアであり、一般的な文献でコキアが採用されているのでコキアにした。
- ・ *Begonia semperflorens* 国内の一般的な文献では*sempervlorens*が採用されているので、ここでは*Begonia semperflorens*とする(Synonymにもならない)。

(5)形態学的検討

以下の植物については、実物を採取し、ルーペおよび実体顕微鏡を使って形態学的な検討を行った。

- ・ホトトギス タイワンホトトギスと日本のホトトギスの交雑種が多いので種形容語の*hirta* はとる。実物で花序の構造が違うことを確認した。花壇に植えられているものは*hirta*ではなかった。
- ・アゲラタム カッコウザミ(ガク片に毛無し)→オオカッコウアザミ(ガク片に毛あり)
- ・ワスレナグサ「ワスレナグサ」は本来、*Myosotis scopioides*英名Forget-me-notをさすが、日本では、総称として使われている。花名鑑p.294に「ガクにかぎ状の毛が無いものが*Myosotis scopioides*」とあり、栽培中のワスレナグサをルーペで確認したところ、かぎ状の毛があった。
- ・フジバカマ 野生のフジバカマとは葉などが形態的に異なる。フジバカマとサワヒヨドリの雑種であることを確認し、学名から種形容語をはずし、属名のみとした。

4 出題候補植物の大学キャンパス花壇での育成と展示

本学園芸教育室の花壇管理者により、出題候補植物の育成と展示を行った。

(1) 育成

4級までのものを中心に、キャンパス内の花壇に実物をそろえるようにし

た。2016年春には、春季5級テッポウユリ、ワスレナグサ、キンギョソウ、4級イペリス・ウンベラータ、ストック、デルフィニウム、シバザクラ、3級カリフォルニアポピー、ヒナゲシ、ラッセルルピナス、シュッコンカスミソウ、1級オニゲシ、キキョウナデシコ、夏秋季4級グラジオラスを植えた。引き続き、夏秋季5級ペチュニア、ベゴニア・センパフローレンス、クルメゲイトウ、3級セイヨウマツムシソウ、1級イソトマ、春季5級ヒアシンスを植えていく。色彩を重視する大学の花壇では使わない草花でも、今後も草花検定受験の見本ためにコンテナなどに植えていく予定である。

検定を行う以上、学内に保有する責任があり、また、花壇材料としての利活用の研究や、種の検討、また検定試験用の写真を撮影するために、実物が必要であると考え。それによってその種が花壇材料としてどのように使われているか、色合い、高さ、開花期などその適性を、植えてある状態で観察、記録することができる。学生に対しては、写真では判別がつかない本来の姿を実物で観察させること、花壇で実際に使っている様子を観察させることに意義がある。

(2) 展示

5級の草花は、キャンパスで咲いたものを採取し、花瓶にさして事務所前に展示した。これにより、学生の学習の便宜と意欲の向上を図った。また、学内での草花検定の認知度を高めることに努めた。今後は、実際の植栽場所を掲示し、学生がそれらの場所へ観察に行くことを促すようにしたい。

5 出題候補および出題植物の写真撮影と収集

(1) 撮影の現状と課題

西村が自宅（行田市）でタネを播いてボーダーに植えて栽培して撮影したものと、本学園芸教育室の花壇管理者がタネを播き、キャンパス内の花壇に植栽して撮影したものが主である。

花壇に植えられているものを撮影すると、他の花も一緒に写ってしまうことが多いため、ポット苗を単体で撮ることも行っているが、それでは花壇に使われている様子とは違ってしまう。

花だけでなく、葉も同時に全体を撮影することも難しい。例えばシュウメイギクなどの場合、アップにすると葉が写らず、全体を撮ると茎が細く葉がまばらなため、背景が強調されてわかりにくい写真になってしまう。今後、バックに適当な色の板を配するなど工夫して撮影する必要がある。

品種や花色の種類が多い植物もあり、複数の種類の写真をそろえておく必要もある。

(2)整理

ファイルのタイトルを和名にし、問題冊子用に縦横比を2:3にして整理している。足りないものについては、購入してそろえるが、今後は独自の写真を撮影し用意していく。

6 恵泉草花検定の大学教育への導入

2014年度は2年生以上の園芸関連の選択科目で5級を実施した。対象は、「生活園芸Ⅱ」4クラスの他、担当教員の申し出により「花壇ボランティア論」「環境デザイン実習」「園芸療法基礎」などのクラスとした。受験者数は、春学期は8クラス160名、秋学期は4クラス83名だった。春学期に春季、秋学期に夏秋季の検定試験を行った。

2015年度は2年生以上の選択科目に加え、1年生の必修科目「生活園芸Ⅰ」で5級を実施した。選択科目によっては4級を行った。点数は成績に反映させないが、合格した場合はプラス評価するとした。

(1)目的

2014年度は、2年生以上で園芸関連の選択科目を履修する学生、すなわち、園芸に少なからず興味を持っている学生に、気軽に草花検定を受けられる機会を提供し、より興味を深めてもらうために授業内検定を始めた。2014年度は5級、2015年度は5級または4級を担当教員が選択した。

2015年度からは、対象を「生活園芸Ⅰ」に広げた。1年次に全学科の学生に5級を受験させた。園芸を必修で学ぶ恵泉の学生には、最低でも5級の草花を知ってもらうために行った。「恵泉の卒業生は全員、身近な草花のことを知っ

ている」というようになれるよう、学生が学ぶことができるしくみをめざした。

(2)方法

1)事前学習

授業内にリストを配布し、スライドで草花を紹介した。2015年度は事務所前で実物の展示も行った。春季の花は春学期に、夏秋季の花は秋学期に紹介した。

「生活園芸Ⅰ」については、2016年度から活用できるよう、授業内検定用に春学期(春季5級)、秋学期(夏秋季5級)の解説のプリントを作成した。開花期や草丈、生活形は、多摩キャンパスの花壇管理者の栽培経験によった。「その草花がキャンパスのどこで見られるか」など学生が学びやすくなるための項目を加えた。

2)実施

2年生以上のクラスの検定試験は、春学期は6月～7月に、秋学期は11月～1月に実施した。「生活園芸Ⅰ」は、春季と夏秋季の試験を1月に同時に行った。

試験問題は前年度の一般受験者用のものを利用したが、2015年度の「生活園芸Ⅰ」で行った春季については、一般の試験に先駆け、出題数を20問に増やした。

授業の一環なので無料とする。

問題冊子は回収し、次のクラスで再使用した。

合格通知書ハガキは印刷せず、担当教員が解答用紙を返却する。その際、解答の傾向を後に分析する資料とするため、コピーして保管した。

(3)結果

特に「生活園芸Ⅰ」においては、社会園芸学科の3割台を除き、合格者が0～1名で、総じて点数が低かった。アサガオが答えられない学生もあり、小学校の理科教育が生徒の学びとして残っていないことが考えられる。ヒマワリを答えられなかった学生の中には白紙解答もあり、はじめからあきらめてい

ると見受けられた。植物に親しみを持つことが人生を豊かにするなど、草花検定を受けることの意義、花の名前を覚えることの意味を伝え、学生の学びを喚起する必要がある。

春季5級のノースポールとマーガレット、夏秋季5級のダリアとヒャクニチソウは、花を見ただけでは区別しにくい。葉にも着目し、花だけでなく植物の全体を見ることが大切である。草花検定のために学ぶことは、花だけを楽しむものではなく、葉の色や形、つぼみから結果するまでの花の変化など、鑑賞の幅を広げていくことにも通じる。花だけを見て花が終わったら捨てるというものではない恵泉の園芸、花壇園芸、花壇のあり方について発信していく役割がある。

2016年度は、2年生以上のクラスは4級とし、希望者には3級を受けられるようにすることを検討中である。「生活園芸Ⅰ」については、2016年度から成績に反映させることとした。20種のうち最低10種を答えられることが条件とした。

7 恵泉草花検定のテキスト作成についての検討

草花検定は、名前を覚えるためだけに行っているのではない。将来的にテキストを作成し、講座で使用することを視野にしている。その手始めに2016年度は「生活園芸Ⅰ」授業内検定用の解説プリントを作成した。

8 恵泉草花検定の効果的広報の検討

(1)これまでの広報

当初から行っていた大学公式WEBサイト「大学からのお知らせ欄」掲載、多摩市立グリーンライブセンター、恵泉園芸センターでのちらし配布に加え、2014年度から授業内検定を実施し、学生への周知をはかった。2015年度夏秋季(3月12日実施)は、さらにポスターを作成し、日比谷公園に掲示を依頼した。

グリーンアドバイザー東京会長の小口健蔵氏(2015年度季4級受験者)が、本検定の意義に共感し、2015年度春季、夏秋に「恵泉草花検定受験講座」を実施してくださった。2016年度7月には、日比谷公園緑と水の市民カレッジで

「恵泉草花検定チャレンジ講座」全1回を実施予定である。

(2) 今後の広報

2016年度は、公開講座「春の草花に親しむ」講師、西村悟朗、全4回(4月、5月、6月、7月)を行う。本講座では、春の草花100種余りについて、スライドや実物を見ながら、和名、英名、学名、科名、原産地、開花期、草丈、花色、および花壇での使い方などについて紹介する。最後には、紹介した草花を用いてボーダーを設計する。ここで学んだ植物の知識が整理され、身につく。草花検定1・2級を目指す方にもお勧めの講座とした。

今後、より効果的に宣伝するため、ポスターを生花店に掲示してもらえよう、卒業生が働くお店へ依頼していく。

まとめ

今後の展開

- ・2016年9月17日に「2016年度春季」1級を実施する。
- ・公開講座「春の草花に親しむ」講師西村悟朗だけでなく、園芸関連の他の講座とも連動させる。
- ・「生活園芸Ⅰ」の授業内検定は、2016年度から成績に組み込む。
- ・受験者情報は、2016年2月、マイクロソフト社のアクセスからエクセルへデータを移行した。これにより、データ更新やサードへの差し込みなど、比較的わかりやすく扱いやすくなった。

【参考文献】

安藤敏夫・小笠原亮・長岡求、2007、日本花名鑑4、アボック社

Christopher BRICKELL, 2010, *RHS Encyclopedia of Plants & Flowers*, Royal Horticultural Society

Christopher BRICKELL, 2011, *RHS Encyclopedia of Plants & Flowers*, American Horticultural Society

Christopher BRICKELL, 2013, *A-Z Encyclopedia of Garden Plants Volume1,2* ,

Royal Horticultural Society

Christopher BRICKELL, Henry Marc CATHEY, 2014, *A-Z Encyclopedia of Garden Plants*, Royal Horticultural Society

園芸学会編、2005、園芸学用語集・作物名編、養賢堂

Janet CUBEY, 2015, *RHS Plant Finder 2015*, Royal Horticultural Society

大場秀章、2009、植物分類表、アブック社

大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩、2015、日本の野生植物1、平凡社

栽培植物分類名称研究所訳、2008、国際栽培植物命名規約、アブック社

副島顕子、2011、植物名の英語辞典、小学館

日本植物分類学会国際命名規約邦訳委員会、2014、国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）2012、北隆館

Steven M. STILL, 1994, *Manual of Herbaceous Ornamental Plants*, Stipes Publishing Llc.

【URL】

The Plant List, 2010, <http://www.theplantlist.org/about/>

Missouri Botanical Garden Plant Finder,

<http://www.missouribotanicalgarden.org/plantfinder/plantfindersearch.aspx>